The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 意図の表明と客観的事象 ： 『哲学探究』六二九-六九三節とその周辺 |
| Author(s) | 丸田, 健 |
| Citation | 年報人間科学. 1999, 20-1, p. 43-59 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/11587 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 意図の表明と客観的事実

## ―『哲学探究』六二九―六九三節とその周辺―

丸田　健

〈要旨〉

私的言語論解釈において、「と思う」は「である」に直結しないのであり、ある命題が事実として認められるには客観的根拠が必要である、という考えが用いられていると思われる。しかしこのテーゼは事実の主張文に一様に当てはまる普遍性を持っているのだろうか。決してそうではないことを意図の表明文を用いて明らかにしたい。そしてこれをヴィトゲンシュタインの意図概念の説明を通して行うことで、彼自身も客観性テーゼの擁護者でないことが分かる。だとすればこのテーゼを感覚の表明に適用する理由も弱められることになり、私的言語論の標準的解釈も再考を迫られるようになるだろう。客観性テーゼに従うなら、様々な心的概念の自己帰属的表明は、客観的に観察可能な行動の代替文として説明されることになる。しかしこのテーゼを放棄するなら、表明文を他の仕方で説明する必要が生じる。また客観性テーゼの擁護者にしても、単なる行動の代替物、またはその延長としては説明しがたい表明の使用があることをそもそも認めなくてはなるまい。本稿では、ヴィトゲンシュタインの『確実性について』の考えを援用し、表明文を客観的根拠なしに確実であるところの自我像命題として理解する方向を提案する。世界像命題を疑うなら我々の世界観が崩壊するのと同様、自我像命題を疑うことは自我の崩壊につながるのである。

キーワード

客観性テーゼ、意図、表明、世界像命題、自我像命題

## 1　はじめに

はじめに心的概念を、三種類に大別しておこう。まず第一には、傾向的dispositionalだと言いうる心的性質がある。心的存在者が備えうる此の種の性質の具体例としては、謙虚さ、嫉妬深さ、怒りっぽさ、知的程度などといったものが挙げられよう。第二のものは命題的態度である。これは、もっぱら命題をその内容として持つ、意図、期待、願望などの心的「状態」を指す。第三のものは、痛みや色といった、意識に現れる感覚印象である。そしてこれら三種類の性質のいずれをとっても、それを或る人に帰属させることは、彼に関する或る事実を主張することになる。だから、そういった帰属文には真理値があり、その文は正しかったり正しくなかったりするわけである。

ところで右の分類[1]は、ヴィトゲンシュタインのそれとは異なるものになっている。彼は或る箇所で、心的概念を二つに分類している（RPP2 §45）。一方は、感覚体験であり、彼はこれを「意識状態」と呼んだ。これらの状態は、それが意識されることによって意識されている間のみ存在する、と言えるだろう。他方に属するのは、信じる、理解している、知っている、意図する、といった概念であり、ヴィトゲンシュタインはこれを差し当たり「傾向性」と呼ぶ（Wenn ich diese letzteren für einen Augenblick "Dispositionen" nenne, ...）。そしてヴィトゲンシュタインの分類のポイントは、彼が「傾向性」と呼ぶものは――「意識状態」とは異なり――意識の中断とともに中断されるのではない、という点にある。しかし私の三分類のポイントはそこにあるのではない。ヴィトゲンシュタインの二分類を踏まえた上で、私の分類の第一のもの――私が心的な傾向性と呼ぶものの幾つか――と第二のもの――ヴィトゲンシュタインが傾向性と呼ぶもの――の間にも、考慮されるべき違いがあると思われるのだ。つまり、特有の意識状態の持続の有無という観点からは、第一のものと第二のものをまとめ、第三のものと対比できようが、帰属の正しさの根拠という観点からは、――多くの場合――むしろ第二のものと第三のものをまとめ、第一のものと対比できるのではないか――ということである。

一つ目の、傾向的性質の帰属文は、次の点で非心的事実の主張文と似ている。例えば「書類は右の引き出しに保管してある」や「チーズは加熱すると溶ける」といった文が真であるには、特定の人の信念とは独立に成り立っている事実によって根拠付けられる必要がある。同様に「私はとても知的である」や「私ほど謙虚な人間はいまい」といった文もまた、本人の信念のみによって真となるのではない。これらの傾向的性質は本質的に、折々の状況下で、一定の振る舞いとして実現されるものだからだ。それゆえそれらの帰属には、各々に相応しい振る舞いの観察によって初めて正しさが与えられるのである。例えば知的さの自己帰属を正当化するのは、その人が、持てる知識や技術を活用し、眼前の状況に対し臨機応変に振る舞えることである――というように。また謙虚さの自己帰属は、その人

が無闇に自己主張的態度をとらないこと、とりわけ「私は奥床しい」などと言わないことによって正当化される――というように。そして振る舞いが万人に等しくアクセスできる事象である限り、本人より他人の方が正しい観察を手にすることがありうる。それ故ある人の心的な傾向的性質に関しては、むしろ他人による理解の方が正しく、洞察に富むことが、多々あるのである。

以上のことと関連し、ある哲学者による次の言葉は、心的な傾向的性質の自己帰属の正当性に対しては、このうえなく適切だと言える――「[正しさの独立の] 基準がないならば、正しさについて語ることは馬鹿げたことになる。……[私の主張] を確証する何らかのチェックが、少なくとも原理的に存在する必要がある。[よって] チェック手段がないならば、その主張は意味をなさない[29]」つまり「他人は誰も原理的にさえ確証できないが、実は私は非常に知的なのだ」という信念表明は、よく見積もっても冗談にしかならないのである。この考えは、「と思う」ことは「である」ことに直結しない――独立の客観的裏付けがない限り、「である」という主観的確信は、実際に「である」ことにはならない――という主張を表している。以後、これを「客観性テーゼ」と呼ぼう。

私が疑問に思うのは、ヴィトゲンシュタイン解釈においてしばしば、客観性テーゼは事実主張文に一様に当てはまるという一般性を持つ、と考えられているかに見えることだ。例えば右でこのテーゼを唱えていた学者は、本当はそれを、感覚印象の自己帰属について主張していたのである――「[客観的基準を欠く感覚印象の生起に関しては、] その感覚が私には同じものだと思われるということ以外、手掛かりはない。このことは〝これは以前に感じた感覚と同じだ〟と〝これは以前に感じた感覚とは違う〟の間に何も違いがないことを意味する[30]」これは客観性テーゼの普遍的適用可能性を前提した上で、独立の証拠を持たない感覚印象の自己帰属の真理性ひいては有意味性を却下する、という論理である。しかし私の考えでは、テーゼの普遍性の前提は端的に間違っている。例えば歯痛に有る様々な質感は、前言語的行動にも、それを取り巻く状況にも表れまい。だが質感に対する独立の基準がないことを理由に、「これは以前感じたのと同じ鋭い痛みだ」と「これは以前感じたのとは違う鋭い痛みだ」の間に何も違いがないと考えるなら、それこそ「馬鹿げた」ことにならないか。

いずれにせよ、客観性テーゼ――という一面的食事――によって心的概念一般を考察しようとする態度は、『哲学探究』の私的言語論の解釈に表わされてきた。それ故この事実は、客観性テーゼはヴィトゲンシュタイン自身のものだ、という暗黙の仮定があることを意味している。クリプキもまた、ヴィトゲンシュタインがこのテーゼの擁護者であることを前提した上で――ヴィトゲンシュタインへの反論として――次のように言う。「……個人が感覚言語一般の習得基準を満たしている場合、新しいタイプの感覚を同定したという彼の主張は、それが公的に観察可能な何ものとも相関していない感覚であっても尊重される……[31]」これについての私の考えは別の箇所で

述べる機会があった[15]ので、小論ではこれ以上その詳細には触れない。しかし独立の客観的基準の魅力は、ヴィトゲンシュタイン解釈において甚だ大きかったことは間違いない。そこで本稿では、命題的態度の帰属、特に意図のそれを取り上げ、テーゼの魅力を感覚帰属とは別の観点から減じることを目的としたい。私には、意図の自己帰属が客観性テーゼに従う必要があるなどという考えも、感覚の場合と同様、殆ど自明の誤謬だと思われる。そしてヴィトゲンシュタインもそのように考えてはいない。まずは後者の点を明示する作業が必要となる。そして私はその見返りとして、このテーゼが私的言語論解釈において持つ効力が副次的に弱まることを期待したい。つまり客観性テーゼがヴィトゲンシュタインの意図についての見解に適用されないことが明らかにされるなら、なぜそれが彼の感覚に対する見解には適用されねばならないのかを説明する必要が、後者の解釈を採用する人に対して生じるのだ。私の考えでは、意図や感覚の概念を考察するとき、客観性テーゼをよりどころにすべきではない。むしろ無根拠なる表明の果たす役割を見据えるべきなのである。

## 2　意図の表明と客観的根拠

2―1　後期ヴィトゲンシュタインが、意図の概念をまとまった形で検討している箇所として、『哲学探究』の末尾部分、六二九―九三の節を挙げることができる。もっとも同概念は――中期からの関心を引き継ぎ――後期諸著作の至るところで断片的に取り上げられているものでもある。彼が言及する意図概念には二種類ある、と言ってよいと思う。一つは行為の意図であり、もう一つは言語表現に関する話者の意図 speaker's meaning である。そして前者には、「彼とハイキングに行くつもりだ」といった未だ実現されていない未来の行為の意図（cf. PI §631, Z §2, etc.）や、「彼とハイキングに行くつもりだったのだ」といった――往々にして――実現されなかった過去の行為の意図（cf. PI §633, Z §1, etc.）が含まれる。また後者には、「〝彼とハイキングに行く〟と言ったとき、私は本当にそのつもりだった」などの言葉の誠実さに関する意図（cf. PI §677, Z §3, etc.）や、「〝彼とハイキングに行く〟と言ったとき、〝彼〟とはA氏のつもりでなくB氏のつもりだったのだ」といった曖昧な語についての話者の意図（cf. PI §661, Z §7, etc.）が含まれる。「考える」や「見る」といった他の心的概念同様、「意図する」もまた、複雑に「分岐した概念」（cf. Z §110）だと言える可能性がある。ところで、行為の意図を表すドイツ語の動詞はもっぱら"wollen"、そして表現の意図を表すのは"meinen"であるのに対し、英語の"mean"や"intend"には、それぞれに両方の意味がある。日本語でも「つもりだ」という一つの語で、二つの意図を表示できるだろう。日本語や英語での表現の一定の統一は理解するに難くない。WollenもMeinenも共に、意志との密接な関わりがあるからだ。なお表現の意図は、クリプキのヴィトゲンシュタイン解釈で主要な役割を果たしているものだ（「プラスのつもりだったのか、クワスのつもりだったのか」）ということを

付言しておこう。

さて、ヴィトゲンシュタインは客観性テーゼを、意図の帰属に適用するのか。私はクリプキの解釈は実質的に、ヴィトゲンシュタインはテーゼを意図にも適用するのだ、という主張をするものになっていると思う。「私が〝x〟という記号で意図しているのがxであったことを正当化する如何なる事実も存在しない。それゆえ言葉によって何かを意図することは不可能だ」という懐疑論的パラドクスを提唱する哲学者として、彼はヴィトゲンシュタインを描いているからだ。クリプキのヴィトゲンシュタインは、客観性テーゼを意図に適用するため、異様な困難を引き受ける哲学者なのである。ただし以上のクリプキ理解は相当切り詰められたものであることを、急いで断っておきたい。つまり客観性テーゼは意図の自己帰属に対し外的事実による正当化を要求するのに対し、クリプキのヴィトゲンシュタインが意図の自己帰属に対し要求するのは外的事実もしくは内的事実である(6)。そして内的事実としてクリプキが検討するのは、明示的に念頭に浮かんだ過去の思考や特殊な感覚質である。これらの「内的事実」が、本人とは独立に同定されうる公的事実でないなら、ヴィトゲンシュタインはそれによって意図が正当化できるとは考えない。彼は「正当化とは何か独立なものに訴えることに存する(PI §265)」と言っているからだ。つまりクリプキの言うように、ヴィトゲンシュタインが過去の意図の表明を正当化する事実を要求しているならば、かつそれを正当化しうるのは本人とは独立の公的事実でなければならないなら、クリプキがヴィトゲンシュタインに帰することができるのは結局は客観性テーゼだけだろう、ということなのである。

いずれにせよクリプキの論は――多々の示唆に富むにもかかわらず――ヴィトゲンシュタイン解釈としては無理がある、というのが今日の大方の意見である。クリプキの問題点の一つとして、次のことが指摘できると思う(7)。彼の著作の序文を見よう――「……意図intention、記憶、夢などについてのヴィトゲンシュタインの見解……は殆ど見過ごすことにした(8)。」つまり彼は、ヴィトゲンシュタイン解釈の中核に、或る表現における話者の意図を置くにも拘わらず、まさのその中核概念についてのヴィトゲンシュタインの見解を見るのは止した！というのである。

そこでクリプキの解釈とは別に、ヴィトゲンシュタインは客観性テーゼを意図の帰属にも適用するのかを問いたい。まず、このテーゼは次のことを要求することになる。つまり本人がどう思っているかとは独立に、また本人が思うが故に口に出す言語的表明とは独立に、意図の同定を可能にする客観的事実がなければならない。ヴィトゲンシュタインは、意図の根拠が何であるかを考察している。そして彼はとりわけ、意図の根拠を本人の（私秘的な）心的状態に求める方向を否定している（e.g. PI §653）。彼がこれを否定していることは、ヴィトゲンシュタインを客観性テーゼの擁護者と見なす解釈者と、そうでないと考える私が一致して認めることだろう。したがってこの点については、本稿ではこれ以上触れる必要はあるまい。だがヴィトゲンシュタインはその結果、表明された意図の根拠を、

客観的に観察可能な振る舞いや状況に求めるという一種の極端な外在主義をとろうとするのだろうか。ヴィトゲンシュタインのテキストには、その可能性を必ずしも否定していないように思わせる箇所がある。まずはこの点を、関連テキストを参照しつつ確認したい。

**(1) 比較的単純な意図**　ヴィトゲンシュタインは、意図には本人の思いなしとは独立の、前言語的振る舞いがある、と考えようとした――「意図の自然な表出は何か？鳥を狙う猫を見よ、あるいは逃げ出そうとしている動物を見よ。（感覚に関する言明とのつながり）」（PI §647）。「心的概念の取り扱いについて、彼には或る「構想」があった。それは、心理的動詞を含む言明は、それが三人称現在の場合は観察によって検証されるものであり、一人称現在の場合は自然な表出に準ずるものである、という見通しだ（Z §472）。これはあくまでも「構想」である、という点は強調に値するかもしれない。いずれにせよ、彼がこの見通しを感覚概念に――少なくとも或る程度――適用したことは周知の通りである。そして同じ見通しが意図概念にも適用できないかという期待を、上の引用は示している。

**(2) 比較的複雑な意図**　(1)の仕方で捉えられる意図は、（意図する側に）何の慣習や知識も前提しない、低次の意図だと言える。しかしヴィトゲンシュタインはさらに、より高次の意図を本人の表明とは別に捉えることは不可能でないと考えていた。これについては、アンスコムが関連しうる指摘をしている。彼女は言う。「他人の意図はどうやって分かるのか。……［他人の意図についての］言明が真だと、いかにして分かるのか。……ある人の意図について、少なくとも何らかの真実を語りたいなら、彼が実際したこと、していることに触れると、成功する公算は高い。……大抵の場合、彼に関する無数の真なる言明の中から我々が選び取るものが、〝それが私の行為だ〟と彼自身が述べることができるものと一致するだろう……[9]」つまり他人の或る行動には、「椅子に座って書き物をしている」や「部屋の音響状態を（鉛筆の摩擦音や手の動きなどによって）変化させている」などの複数の記述がそれぞれに真でありうる。だがこれらのうち、我々が常識的に選び出すものが普通、行為者が意図した行為だ、ということである。

その通りであろう。だが何故、そのようなことが可能なのか。ヴィトゲンシュタインなら、こう答えるだろう――「意図は、状況、人間的慣習や制度に織り込まれている（PI §337）」からだ、と。この考えは、例えばチェスを例に説明できる。「私がチェスで或る一手を指し、誰かにこう尋ねられるとする。〝君は王手のつもりだったのか。〟私は〝そうだ〟と答えるが、彼はまた尋ねる。〝君がそのつもりだったと何故わかるのだ……？〟私はこう答えうる。〝こういった状況では、これが王手を意図することなんだ。〟（BB p.147）」つまりチェスというゲームが存在し、私がそれを習得しており、私が誰かとチェスをしており、ある局面で或る一手を指す云々、なら、そういった状況や振る舞いが、私の意図を露わにすると言える場合がある。

2―2　客観性テーゼは、本人の内心とは別に、彼に特定の意図を帰属することを可能にする客観的指標を要請するのだった。そして我々は、そのような指標は存在しうるというヴィトゲンシュタインの考えを確認した。したがって彼の見解(1)・(2)は差し当たり、客観性テーゼの枠内に収まるものである。そして確かにそのように捉えうる意図はあるだろう。例えば我々は、物言わぬ動物や人にも意図を帰属させるのだ。また意図の状況依存性という点も重要である。例えば、チェスや将棋の制度がないならば「王手のつもりだ」という表明は意味をなさない、という意味で。

しかし(1)と(2)は或る意味で、意図をその主題とする言語実践の本質を示していない、と言える。というのも客観的指標によって行為者の意図が既に明白な場合、我々は自明なことをことさら語りはしないからだ。むしろそれを暗黙の了解とした別の言語ゲームが展開されることになろう。我々が意図について敢えて語るのは、他人の意図を尋ねたり推量する場合であったり、もしくは他人に自分の意図を伝える場合である。そしてなぜ、我々がそのようなことをするのかと言えば、それは、我々人間の重大な関心事である意図が、振る舞いやそれを取り巻く状況から読み取れないことがあるからに他ならない。意図については往々にして、ジグソーパズルのように既にできあがった周囲に組み込まれるピースが、ただ一つあるのではない。つまり客観性テーゼの要求から漏れる意図がある。(2)の場合でさえ、本人の表明は他者が帰属した意図を阻却しうるのだ。そしてヴィトゲンシュタインは、この種の視点を見過ごしたわけではまったくない。これを説明しよう。

**(a)　実現されなかった行為の意図**　この種の意図について、次の箇所を引いておきたい――

「君はさっき言葉を遮られた。何を言うつもりだったか、まだ覚えているか？」――私が今も覚えており、言ってみせるなら――それは、私がそれをさっき既に考えていたのだが、言わなかっただけだ、ということを意味するのか。いいや。……

……しかしもちろん、文を続けるためのヒントになる事柄は全て、状況や私の思考の中にあった。……それは省略されたメモから思考過程を完成させることに似ている。だから私は、このメモを解釈しているのではないか。［しかし］その状況では、ただ一つの続け方しかあり得なかったのだろうか。もちろん、そうではない。……

「私は……と言うつもりだった。」――君は様々な詳細を思い出す。しかしそれら全体をもっていても、この意図は示されないのだ（PI §§633-5. 最後の強調は筆者追加。また全体の段落変更を加工した）。

ここで扱われているのは、実現を阻まれた発話の意図の事後的表明である。私の話が遮られた直後、私は自分が言わんとしていた文を、

いとも軽々と続けてみせることができる。なぜか。当の文を、私が既にリハースしていたからだろうか。そういう場合はあるにはあろう。だが稀である。では、私が言わんとしていたことは、直前の状況や当時の私の雑多な思考の中に萌芽的に含まれていたのだろうか。確かに文脈的状況は重要である。しかし、そういった状況は、遮られた文の唯一の展開を決定するのではないだろう。そしてある文を既に唱えていた場合でさえ、そのこと自体は私が次にその文を言うだろうということを決定しないだろう。つまり状況をいかに詳細に調べようとも、私が次に言うはずである内容は——当然とも言えようが——そこには見いだすことはできないのである。ここでは、何を言うつもりだったかの表明の正当化の根拠を、当時の心的状態に求めることが拒まれている。と同時に、当時の状況もしくは振る舞いに求めることも拒まれている。つまり客観性テーゼは棄却されているのだ。

(b) 多義的な表現の意図　これに関しては、次の箇所を挙げることができる——

君に痛みがあり、同時に隣でピアノの調律が聞こえるとする。君は言う——「これはじきに止むだろう。」君がそれを痛みのつもりで言うのと、ピアノの調律のつもりで言うのとでは、大いに違うだろう！——もちろんそうだ。しかしこの違いは何に存しているのか。

私は次のことを認める——あることのつもりで言ったり思ったりする多くの場合、それには注意の方向が対応している。並びにしばしば、視線や身振り、または目を閉じること——これは「内面を見つめること」と呼びうる——が対応している。

［しかし］ある人が痛みの振りをし、「これはじきにましになるだろう」と言うとする。彼はこれを、痛みのつもりで言った、とは言えないか。にもかかわらず、彼は痛みに注意を向けたりはしていないのである。——また私がようやく、「それは止まった」と言うときはどうか（PI §§666-7. 段落変更を加工した）。

ヴィトゲンシュタインはさらに、こう言っている——

「君がピアノの音のつもりだったことは、君がそれのことを考えていたことに存する。」……

「つもりであること」が何かに存するbestehe、と考えることが誤りなのだ（Z §16. 原文は「音」でなく「演奏」。強調は筆者追加）。

表現の意図の違いは告白とは別の何かに存するはずだ、という考えがここでの検討対象である。候補は、視線や身振りであったり、内観的な注意の方向であったりする。そしてヴィトゲンシュタインはまず、後者の可能性を退けている。痛みの振りをしつつ「これはじきに止むだろう」と言うとき、存在しない——すなわち内観的にも

注意を向けようがない――痛みを意味することができるからだ。もちろんヴィトゲンシュタインは、ピアノの方に漫然と視線を向けつつ、「これはじきに止むだろう」と痛みのつもりで言うことも可能なことも認めるだろう。ヴィトゲンシュタインの結論はこうであった――意図が何かに存すると考えるのが、そもそもの誤りなのだ。特定の心的状態であれ、身振りや行動であれ、意図はそれとは別の何かに存するのではない。ところが客観性テーゼはまさに、意図が存するところの独立の客観的事実を要求する。よってこのテーゼが、ヴィトゲンシュタインと無関係であることが、またもや分かるのである。

ヴィトゲンシュタインの考えでは、客観性テーゼは次の理由で間違っている――

> 我々の誤りは、「原初的現象」として事実を見なすべきところに、つまり「この言語ゲームが行われている」と言うべきところに、説明を探そうとすることである。(PI §654)。

意図の表明は、それ自体所与のものとして受け入れるべきものであり、それに独立の正当化を求めることは、言語ゲームの本質を見誤ることである。意図の自己帰属の根拠は、とりわけ内的状態に求めるべきではない。かといって振る舞いなどに求めるべきでもない。そもそもどこにも求めるべきではないのである。

そして次の覚書は、意図の告白にそっくりそのまま当てはまる――

> 私はカクカクと思った、という告白の真理性の基準は、何らかの出来事の正しい記述の基準ではない。そして正しい告白の重要性は、それが何らかの出来事を確実に正しく写しているということにあるのではない。その重要性はむしろ、告白から引き出せる特定の帰結にあるのだ。そして告白の真理性は、正直さという特別の基準が保証するのである(PI p.222(f). 最後の強調は筆者)。

この箇所は一人称権威の承認にほかならない。つまり正直な告白において、「と思う」は「である」に直結する。そしてこれは、表明とは独立の根拠を要求する客観性テーゼが拒否すべき――あるいは拒否しないなら、それに対する満足のいく理由を与えるべき――ものだと思われる。この権威に注意を払うなら、意図は状況に織り込まれているという健全な洞察でさえ決して十分ではないことが分かる。「これはじきに止むだろう」を例に取ろう。本人が、痛みのつもりだったと言うならば、当時の状況がその観点から理解されることになろう。例えば、彼は痛みに気を取られていたために調律の耳障りな音はどうでもよかった云々の状況があった、というように。また彼がピアノのつもりだったと言うならば、状況が異なって見えてくる。例えば痛みをしばし忘れるほどに彼は調律音に注意を向けていた、云々の状況があったのだ、という具合に。ここでは意図は状況に織り込まれているというよりは、むしろ意図が状況の断片を取捨し、

意図を基調に状況こそが織り出されるのだと言える。意図は状況に織り込まれつつ、状況も意図に織り込まれる。つまりこの場合、外的状況によって彼の返答が決まるどころでなく、彼の返答次第で、逆にその状況（の陰影）までもが変わるのである。

## 3　意図の表明の役割

### 3―1　意図の表明（またその他の心的様態の表明）は、客観性テーゼに従うことなく、一人称権威を持ちうる。ではそのような表明とは、いかなる言明であるのか。本稿の残りの部分は、まずはこの問題の性格の説明に、次にそれに答える努力に、充てたい。

ヴィトゲンシュタイン解釈ではしばしば、表明は行動の代替だとして特徴付けられる。その原因の一端は、まさにヴィトゲンシュタインにあると言わざるを得ない。既に触れたが、心的概念の自己帰属的言明を前言語的表出に準ずるものとして説明するという「構想」が、彼にあったからだ。原初的行動が、例えば痛みの表明を教える際の公的基準となり、そしてその表明は叫びの代替だとされるのである。客観性テーゼに依拠するヴィトゲンシュタイン解釈は、彼のこのような側面に乗じるものだ。しかし典型的に表出の代替として説明される痛みの自己帰属にさえ、そのようなものとしては理解しがたいものがある。例えば痛みの日記を付けるとき、私はノートに向かって叫んでいるわけではないからだ。そしてこの点は、ヴィトゲンシュタインも否定するところではないのである。例えば彼は――叫びではなく、かつ物体の記述とも異なる――感覚の「記述」がありうることを認めている（cf. PI p.189）。だがこの「記述」とは一体どういったものなのかは、定かでない。さらに、痛みの表明を叫びの単純な代替だと言うにしろ、あるいはまた代替のさらなる発展形態だと呼びうる「記述的」表明もあるにしろ、表明を根本的に叫びになぞらえるなら、なぜ表明だけには真理値や否定形や、また時制があるのだろうか。これらの問題は、批判者によりこれまで指摘されてきた。したがってヴィトゲンシュタイン（主義者）は、表明に対し補足的説明を与える義務がある――と私は思う。

意図の自己帰属については、問題はさらに深い。というのもヴィトゲンシュタインは次のように述べるからである――

> 子供はいかにして「僕はそのとき、［石を］投げるつもりだったんだ」という表現を使うことを学ぶのか。そしてその子が本当に、私が「……するつもり」と呼ぶ心的状態にあったことはどうやって分かるのか（Z §42）。

> ……意図の告白のようなものがある、ということは奇妙なことではないか。それは非常に不思議な言語的道具でないか。一体、それについて、何がそんなに不思議なのか。そう――人がいかにしてこの言語使用を学んだのかを想像することが困難なのだ。それは実に微妙なのだ（Z §39）。

意図の自己帰属はいかにして学ばれたのか。ヴィトゲンシュタインはここで、それは或る振る舞いを言語表現に代替させることで教えられたのだ、という考えを試そうとさえしない。おそらくは、「いかにして学んだのか」に対する適切な答えは、「日本語の実践を通して」であろう。しかし先と同じ疑問が再び生じる。つまり意図の告白文が、行動の単なる代替物でないなら、そしてもとより（少なくとも、本人とは独立の正当化を要請するものとしての）心的状態の記述文でないなら、それは一体何なのであろうか。

意図の表明文を特徴付けるために、言語行為論的とも呼びうる方法が考えられるかもしれない。これはクリスピン・ライトC. Wrightが示唆した方向である。彼はヴィトゲンシュタイン的見解を引き受けて、意図の告白は心的状態の記述文ではない、とする。彼によれば、意図の表明は、意図の存在を「記述するのではなく構成する役割[10]」を担っている。これを説明するために、ライトが示すのは以下のようなアナロジーである。ボールゲームの際、観戦者が「ボールはインだった」と言うならば、彼は或る物理的事実を記述している。これに対し、「ボールはインだった」と言うのが審判ならば、彼は観戦者と同じことをしているのではない。つまり彼はボールゲームという制度によって付与された権威を通し、この制度内で事実と見なされる事柄を構成しているのである。彼が述べることが、すなわち事実として見なされるのである。同様に、言語ゲームが付与する権威により、本人の意図の告白は、彼に関する事実として見なされる。このように、意図の自己帰属を言語行為論的に考えるという発想には、某かの発展の余地があるかに見える。しかし審判の判定の構成的役割と、意図の表明の構成的役割の類比自体は、さほど遠くまで押し進めることはできない。そしてこれはライト自身が認めていることである。審判の事実構成的言語使用は観察に基づいているが、意図の表明は同種の観察に基づいてはいないからだ。

では、より標準的な言語行為に範を取るならどうか。例えば約束は、独立に成立している事実を記述するものではない。「私は……約束する」と当人が発言する、その発話行為によって成り立つ事実である。同様に、意図の表明は、独立に成立している事実を記述するものではない。それは本人が表明することによって、言語にもたらされる事実なのだ――というわけである。そして両方の言語使用は、独立の事実の観察を利用するものではない。しかし両者の比較にもまた、困難がある。つまり約束は、まさに発話によって、それと同時に構成されるのに対し、意図の場合は実は、必ずしもそうではないからだ。つまり「昨日、私は……のつもりだった」という告白が表す意図は――過去に表明されていなくとも、また過去に明示的に念頭になかったとしても――発語以前すでにあったものとされるはずなのである。

意図の存在を証拠立てるいかなる事実も存在せず、にもかかわらず意図の表明は事実を述べるものなら、その事実は表明によってもたらされる――一方ではこう言えなくもない。しかし過去の意図は、私が表明せずとも、また内心で明示的に言語化されておらずとも、存在していた――他方ではこう言うべきでないか。このあたりはヴ

ィトゲンシュタインにとっても微妙な問題であった――

「君は〝それはじきに止むだろう〟と言った。――君はうるさい音のことを考えていたのか、それとも君の痛みのことを考えていたのか。」さて彼が「私はピアノの音のことを考えていた」というなら、このつながりが存在していたことを彼は確認しているのか。それともそのつながりを言葉で作り出しているのか。――両方だと言えないか。彼が言ったことが真ならば、そのつながりは存在していたのでないか――そしてそれにも拘わらず、彼は存在していなかったつながりを作り出しているのでないか（PI §682）。

ヴィトゲンシュタインは続けてこう言う――

私の言葉は存在していたつながりを述べるものだ――これを支持する理由には何があるか。そう、私の言葉は、それと共に初めて現れたのではない様々な事柄と関係している。それは例えば、もしそのとき尋ねられていたなら、私は特定の答えを述べていただろう、ということを言っている。そしてこれが条件法的にすぎないにしても、それは過去について確かに何事かを述べている（PI §684）。

つまり、「それ」で過去に何を意図していたかを述べる表明が、その意図が表明以前に既に存在していた事実を言うのだとするなら、それを支持する理由はあるのか。ヴィトゲンシュタインは次の理由を試みに挙げる――そのとき尋ねられていたならば、私は自分の意図を説明して見せただろうからだ、と。ただ、「私はそうして見せただろう」ということ自体も、無根拠な表明であろう。この反実仮想的表明は、過去に既にあった「反事実的事実」を述べるものなのか、それともこの事後的表明によってその「反事実的事実」が作り出されているのか。この疑問が再び生じるだろう。これに対する答えもまた、「両方でないか」ではないか。ともあれ――振り出しに戻って繰り返そう――過去の意図をある意味で構成しつつ、その意図が過去に既に意図があったことを語る表明とは、一体どういう言語使用なのか。

## 3―2　以下では、表明を説明する或る試みを、まったく別の角度から提案するつもりである。私は、ヴィトゲンシュタインの晩年の思索に学ぶべき発想があるのではないかと思う。そこでまずは必要な限りにおいて、それを瞥見しておこう。

ヴィトゲンシュタインは『確実性について』で、外界についての或る特殊なクラスの経験命題を考察している。それらは例えば、（ムーアが取り上げた）「地球は私が生まれるずっと前から存在していた」「ここ↑に（私の）手がある」といったものである。ヴィトゲンシュタインはムーアの命題に加え、「水は百度で沸騰する」といった基礎的経験法則（OC §293）や、「私の名前はK・Mである」といった、発言者にとって基本的な、個人的な外在的性質の帰属文（OC §515-

6）も考察している。第一に、これらの命題は、「有意味」に疑うことができない（e.g. OC §117）。有意味な疑いには納得できる根拠が必要であるからであり（e.g. OC §122）、かつこれらを疑ってみるべきそのような根拠が我々にはないからである。もっともこれらの命題の否定を、（有意味に）想像することはできよう。さもなくばSFなどの荒唐無稽なエンターテインメントは成り立たない。だが単なる想像可能性と正当な疑いは異なるものだ（e.g. OC §4）、ということも忘れるべきでない。我々が実生活において百年前の歴史資料を照合するとき、また、この手は幻かもしれないから火にくべても痛くない可能性があるなどと思わないとき、我々はやはり、これらの命題を確実なものとして前提しているのである。第二に、その確信は根拠に基づくものではない（e.g. OC §166）。例えば科学者は数十億年前に地球が存在していたかどうかを調査し、成功すれば何らかの証拠を得るだろう。それによって我々はその当時すでに地球が存在していたことを信じるようになるだろう。だが私が生まれる数十年前に地球が存在していたことを、当時の写真や記録を根拠に確信しているのだろうか。そうではあるまい。むしろ当時の写真や記録はその当時のものであると既に確信することによって、この確信は、そのときに地球は存在していたという私の確信の一部をなしているのである。ヴィトゲンシュタインは、我々はこれらの命題を根拠なしに鵜呑みにしているのだとした。さらにそれらが根拠を持たない以上、それらは知識の領域に属するものではない、とした。第三に、これらの命題は、外界に関する我々の知識ではなく、そういった知識の基盤をなすものである（e.g. OC §401）。我々の経験的探究は、我々が疑うこともできず、また根拠を与えることもできない、そういった――論理体系の公理のような――諸命題のネットワークを前提した上で成り立っている。ヴィトゲンシュタインは、そのような命題は我々の「世界像」（OC §§93-5, §167）を形成するのだとした。

このように、独立の正当化を持つことなしに、揺るぎない真理性を備えた命題がある。そして、これらの命題は――意外にも――或る意味で意図の表明文に似ている――このことに注目したい。つまり私が自分の意図を疑うことは、もちろん意味をなさない。にも拘わらず、私は自分の意図に対して根拠を示すことはできない。それゆえ、もし根拠を伴う正しい信念だけが知と呼ぶに値するとするなら、私は自分の意図を「知っている」と言うことはできない（cf. PI §679）。このように無根拠ながらも疑うことができないという意味で、意図の自己帰属文と世界像命題は類似しているのである。そして世界像命題は、我々の外界に関する知識を成り立たしめているところの世界の動かし難い根幹を示すのであった。では意図の自己帰属文が何かを示すとするなら、それは何であるか――これを問うことができるはずだ。

これに答えるにはまず、意図の表明はどのような役割を果たしているのかが問われるべきである。ヴィトゲンシュタインは次のように言う――

私はなぜ彼に、私がしたこと以外に、意図をも伝えようとするの

か。……なぜならそのとき生じたことを越え出る、私についての何かを、彼に伝えたいからだ。何をするつもりだったかを言うとき、私は彼に自分の内面を打ち明けるのである（PI §659）。

この箇所に疑いを差し挟む余地はないだろう。意図の表明文は「私についての何か」「私の内面」を示すものである。だがここで現れる「私」とは何か。『青色本』にある次の記述を見たい——

「私」という語には二つの異なる使用がある。一方は「客体としての使用」、他方は「主体としての使用」と呼びうるものである。第一の種類の例は次のようなものである——「私の腕は骨折している」「私は六インチ成長した」「私は額に瘤がある」「風が私の髪をなびかせる」。第二の種類の例は、「私にはカクカクが見える」「私にはカクカクが聞こえる」「私は自分の腕を上げようと試みる」「私は雨が降るだろうと思う」「私には歯痛がある」である。これらの範疇の違いは、次のように言うことで指摘できるだろう——第一の範疇の事例は、特定の人物の認知と関わっており、これらの事例では誤りの可能性がある。……他方、私が、自分には歯痛があると言うとき、人物の認知の問題はない。「歯痛があるのは君だということに、君は確信を持てるのか？」と問うことは無意味である（BB pp.66-7）。

原文の文脈では、この箇所は独我論や「私」の指示対象の有無といった問題と交差する。だが、いまはそういった関連を一切無視するなら、この箇所で指摘されていることは後期ヴィトゲンシュタインも否定しないはずである[11]。さて、私の意図の表明また感覚の表明は、根拠なしに確実だと見なされる不可謬性をもった命題なのであった。だが上の引用によって気づかされるのは、これらの表明は二重の意味で不可謬なことである。つまり第一に、私は足でなく腕を上げようとしているつもりであること、また私には痒みでなく痛みがあることを、私は間違えない。第二に、腕を上げようとしていたり、また歯痛があったりするのは、他人でなく私であることを、私は間違えない。さて世界像命題を疑うならば、我々にとっての世界の根幹が崩れるのであった。内面の表明を疑うことで崩れ、それを受け入れることで浮き彫りになるのは何か。結論を述べよう。私の内面についての表明は、二重の不可謬性の中に見い出される「主体としての私」を構成するものである。そしてそれを「自我」と呼んでよいとするなら、それらの表明文は——「世界像命題」に倣い——「自我像命題」である、と言うことができる。内心の表明は、単なる叫びの変形にとどまるものではない。それは無根拠ながらも確実な、真理値や時制などを担う命題として、「主体としての私」を形作る重要な役割を言語実践において担っている——こう言うことが可能なのである。

**(1) 主体としての私の人格的側面**　まず意図の表明について。例

えば、証拠がないために自分が本当に何を意図しているのか分からない、と私が本気で言い出すとする。こういう事態になれば、私という人間が危うくなっていることであろう。また私が「誰かがハイキングに行きたいと思っているのだが、それは私の意図だろうか」などと言い出すなら、これもまた私が危うくなっているのである。すなわちここで浮上している「私」とは、様々な意図の自己帰属の主体としての私であり、この能力の故に私は理性的主体として、自分の行為に責任を問われる存在となるのである。この意味での「私」を「主体としての私」の人格的側面と呼ぶことにしよう。そして意図の自己帰属だけでなく、予期、願望、信念、思考といった様々な志向状態の自己帰属文も、「主体としての私」のこの側面に照らして理解することができよう。

**(2) 主体としての私の現象学的意識状態の側面**　しかし主体としての私は、その人格的側面のみによって尽くされない。命題的態度は、法人格やその他の団体にも帰属することができるからである(cf. Z 848)。法人格も或る意味での「人」であり、それは意図やその他の命題的態度を持ちうる。では法人格になく、私のような自然人格にあるものは何か。それは現象学的な意識状態であろう。痛みや残像などの、いわゆる感覚質に関する表明文は、「主体としての私」のこの側面を表すものとして理解できる。

いわゆる私的言語論についてのコメントをもって、本稿を終わらせたい。ヴィトゲンシュタインの標準的解釈によれば、客観性テーゼに従わない感覚体験は、表明とは独立の根拠を持たないという理由で否定されるべきものであった。しかし感覚の表明は「主体としての私」の一側面を形成する自我像命題であり、それは独立の根拠を持たないにもかかわらず、揺るがすことができないものである。「[客観的基準を欠く感覚印象の生起に関しては、] その感覚が私には同じものだと思われるということ以外、手掛かりはない。このことは〝これは以前に感じた感覚と同じだ〟と〝これは以前に感じた感覚とは違う〟の間に何も違いがないことを意味する。」このような私的言語論の一般的解釈は、この意味での「私」を脅かす。そしてまさにそれが故に、拒否されねばならないのである。

***

(本稿は、日本科学哲学会第30回(1997年度)大会での発表原稿を全面的に改訂したものである。)

略号

ヴィトゲンシュタインの著作への言及は、以下の略記法に従って行う。

BB　*The Blue and Brown Books.*
OC　*On Certainty/Über Gewissheit.*
PI　*Philosophische Untersuchungen/ Philosophical Investigations.*
RPP2　*Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie, Band II/ Remarks on the Philosophy of Psychology, Volume II.*
Z　*Zettel.*

## 註

(1) この分類は、もとより完全さを期そうとしたものではない。例えば「笑っている」は傾向的心的概念でなく、行動的心的概念であるし、「怒っている」等の感情に関する心的概念は、（込み上げる）感覚体験を伴う行動的もしくは瞬時的な傾向的性質だと思われる。要するにこの三分類は本稿の趣旨に必要な限りでの分類であり、その限りで事足りるものとして理解されたい。

(2) Hartnack (1987), p.93.

(3) *Op. cit.*, p.94.

(4) Kripke (1982), p.103n.

(5) 拙稿 (1998).

(6) E.g., Kripke (1982), p.14.

(7) これに関しては奥教授の指摘も参照されたい。奥 (1992), p.125.

(8) Kripke, *Op. cit.*, p.vii.

(9) Anscombe (1957), pp.7-8.

(10) Wright (1987), p.401.

(11) ただしさらに断っておくならば、ウィトゲンシュタイン自身はこの二分法に再び言及することは――私が知る限り――ない。おそらく後期においては、「私」の用法の二分法の間に、中間的事例があることが指摘されるのではないか、と私は予測している (cf. PI §411)。これについては述べるべき点も多いはずだが、差し当たりここでは、『青色本』の二分法は見取り図としては否定される必要がない、という私の考えを確認しておきたい。

## 引用文献・参考文献


Anscombe, G.E.M., *Intention* (Oxford: Basil Blackwell, 1957).

Glock, Hans-Johann, *A Wittgenstein Dictionary* (Oxford: Blackwell, 1996).

Hartnack, Justus, *Wittgenstein and Modern Philosophy*, Cranston, M. (tr.) (Indiana: University of Notre Dame Press, 1987; 1st edn 1965; originally published in Danish by Gyldendal, Copenhagen, in 1962 under the title *Wittgenstein Og Den Moderne Filosofi.*).

Kripke, Saul, *Wittgenstein on Rules and Private Language* (Oxford: Blackwell, 1982).

丸田　健、「『哲学探究』、感覚日記の議論について」、『科学基礎論研究』第九十号、1998年、15―20頁。（

奥　雅博、『思索のアルバム』（勁草書房、1992年）。

Wittgenstein, Ludwig, *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie, Band II/ Remarks on the Philosophy of Psychology, Volume II* (Oxford: Blackwell, 1980).

――*The Blue and Brown Books* (Oxford: Blackwell, 1958).

――*On Certainty/ Über Gewissheit* (Oxford: Blackwell, 1969).

――*Philosophische Untersuchungen/ Philosophical Investigations* (Oxford: Blackwell, 1953).

――*Zettel* (Oxford: Blackwell, 1981; 1st edn, 1967).

Wright, Crispin, "On Making Up One's Mind: Wittgenstein on Intention", *Proceedings of the 11th International Wittgenstein Symposium* (Vienna: Hölder-Pichler-Tempsky, 1987).

# Avowals of Intention and Objective Facts: *Philosophical Investigations* §§629-693 and Their Environs

Ken MARUTA

The standard interpretation of the so-called "private language argument" embodies the thesis that one cannot infer "is" from "seems" and that objective grounds are therefore necessary for an empirical proposition to be conferred the status of truth. However, the presupposition of the universal applicability of this thesis is dubious, and the present article explicates and emphasises this doubt through an examination of the avowals of one's intention. The discussion will be based on the exegesis of Wittgenstein's philosophy, in the course of which it will be made clear that Wittgenstein himself was not the defender of the "objectivity thesis". If this analysis is correct, the reason is undermined why avowals of sensation should be understood as conforming to the thesis. This conclusion implies that the standard interpretation of the private language argument stands in need of serious re-consideration.

In the contestable scheme of the objectivity thesis, self-ascriptive avowals of various mental concepts are regarded as replacements of pre-linguistic behaviour. If the thesis is to be abandoned, it will be necessary to provide an alternative understanding of avowals. Even the defender of the thesis has to admit that *some* avowals exist which could not be viewed as mere replacements of natural behaviour or their complex extensions. In this article, I will extend Wittgenstein's ideas as appear in his *On Certainty*, and suggest an alternative account of avowals as "self"-portrait propositions, which are as certain as the world-picture propositions and equally not based on any grounds. Just as the scepticism of world-picture propositions leads to the collapse of the world as we see it, the scepticism of "self"-portrait propositions threatens our "persons".

**Key Words**

Objectivity thesis, intending/meaning something, avowals, world-picture propositions, "self"-portrait propositions.